絹の瞳

フランソワーズ・サガン

朝吹登水子 訳

Des yeux de soie ——— *Françoise Sag*

弱の瞳

フランソワーズ・サガン

朝吹登水子 訳

SHINCHOSHA

絹(きぬ)の瞳(ひとみ)(短編集) ✻ フランソワーズ・サガン ✻ 朝吹登水子(あさぶきとみこ)訳
✻ 印刷 1977.3.10 ✻ 発行 1977.3.15 ✻ 発行者佐藤亮一 ✻ 発行所
新潮社 ✻ 東京都新宿区矢来町71 ✻ 郵便番号162 ✻ 電話業務部
(03) 266-5111 編集部 (03) 266-5411 ✻ 振替東京 4-808 ✻ 印刷所
二光印刷株式会社 ✻ 製本所大口製本 ✻ 定価950円
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。
© Tomiko Asabuki, Printed in Japan, 1977.

DES YEUX DE SOIE by FRANÇOISE SAGAN/Originally Copyrighted by Librairie Ernest Flammarion, Paris,1975. This book is published in Japan by arrangement with Librairie Ernest Flammarion through the Bureau des Copyrights Français in Tokyo.

F・サガン短編集『絹の瞳』――目次

絹の瞳 ‖ 7
ジゴロ ‖ 31
横たわった男 ‖ 47
未知の女 ‖ 59
五つのうわの空 ‖ 75
ジェントルマンの樹 ‖ 83
ある夜の外出 ‖ 93
歌姫 ‖ 99
スノッブな死 ‖ 109
釣りあそび ‖ 121

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

縄底靴をはいた死 ‖ 129
左の瞼 ‖ 141
犬の一夜 ‖ 161
ローマの別れ ‖ 171
かどのキャフェ ‖ 185
七時の注射 ‖ 193
イタリアの空 ‖ 201
陽はまた沈む ‖ 217
孤独の池 ‖ 225
あとがき ‖ 234

絹の瞳

J. H. ⌃

"DES YEUX DE SOIE" de Françoise SAGAN

© FLAMMARION, 1975

絹の瞳 — DES YEUX DE SOIE

ジェローム・ベルチエはものすごいスピードで車を走らせていた。彼の妻の、美しいモニカは、夫の無鉄砲な運転を気にしないために、生来の無頓着さをありったけ発揮する必要があった。いま、彼らは週末に羚羊狩りに出かけるところで、それはジェロームにとってこのうえない楽しみの遠出だった。なぜなら彼は狩猟が好きだったし、妻も田舎も、そしてこれから迎えにゆく友人たち、つまりスタニスラス・ブレムとその同伴者までも好きだったから（もっとも、スタニスラスの同伴者は彼の離婚以来だいたい二週間ごとにかわってはいたが）。

「連中、時間を守ってくれるといいんだがね」とジェロームが言った。「あいつ今度はどんな娘を連れてくると思う？」

モニカは疲れた様子で微笑した。

「あたしにわかるはずないわ。とにかくスポーティな女だといいわね。あなたの狩り、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

きびしいんでしょう？」

彼はうなずいた。

「とてもきびしいさ。それにしてもスタニスラスの奴、なんだってあんなに色男ぶって得意になっているんだろうね、あの年齢で……つまり、ぼくと同じ年齢で、ということになるが。もし奴の仕度ができてないと、飛行機に乗り損うからね」

「あなたは何ひとつやり損わないわ」と言って、彼女は笑った。

ジェローム・ベルチエは横目でちらっと妻のほうを見た、彼女の言葉がどういう意味なのかと、心の中でまたもや考えながら。彼は男性的で、忠実で、落ち着いた男だった。自分がかなり魅力的だということを知っていたし、十三年前に結婚して以来この女性――彼がほんとうに愛した唯一の女性――に最高に快適かつ安泰した生活を保証してきたのだ。しかしときどき、彼の美しい妻の平静さ、黒い静かな瞳の背後に何があるのだろうと考えることがあった。

「それ、どういう意味？」

「あ、な、た、は、何、ひ、と、つ、や、り、損、わ、な、い、っていう意味よ。あなたのお仕事も、あなたの人生も、乗る飛行機も。だから、今度の羚羊もきっとやり損わないと思うわ」

「そう願いたいね」と彼は調子を合わせた、「ぼくは空弾を打つために狩りにゆくんじ

やないからね。もっとも、あれは狩り出すのにいちばんむずかしい動物なんだが」

彼らはラスパイユ大通りのあるマンションの前に到着し、ジェロームが三回目のクラクションを鳴らすと、ようやくひとつの窓がひらき、ひとりの男が上体を現わして大きな身振りで歓迎の意を表した。ジェロームはドアの窓から頭を突き出して大声で叫んだ。

「早くおりて来いよ。飛行機に乗り損うぞ」

窓がしまり、二分後にスタニスラス・ブレムとその同伴者が玄関から出てきた。

スタニスラス・ブレムは、ジェロームが自信をもち、頑丈で、果断であるのと対照的に、長身で、やさがたの、不安げな外観をしていた。連れの若い女性は金髪で美しい、世間体を気にする様子の、ウィーク・エンド用といわれるタイプの女だった。彼らは後部のドアから急いで車にはいりこみ、スタニスラスが紹介をはじめた。

「親愛なるモニカ、ベティーを紹介します。ベティー、こちらがモニカとご主人、有名な建築家のベルチエ氏。いまからきみは彼の指揮下に入るんだ。彼がキャプテンっていうわけさ」

みんなは儀礼的に笑い、モニカはベティーという女性の手を愛想よく握った。車はロワッシー空港へ向けて出発した。スタニスラスは前に乗り出して少し甲高い声で訊ねた。

「どうです、出発の気分は。ふたりともわくわくしてるんでしょう?」

彼は答えを待たずに連れの方にふり向いて微笑した。彼はそういうはしゃいだ場面を

演じるとき、とても魅力的だった。ちょっと退廃的で、プレイボーイめかした、女蕩しの様子。うっとりとベティーは彼にほほえみかえした。

「考えてもみたまえ」と彼は大声で語をついだ、「ぼくはこの人物をもう二十年来知ってるんだ。学校でいっしょだったのさ。ジェロームはいつも首席で、みんなで暴れまわる休み時間には彼のパンチが最強だったよ。それもたいていはぼくを守ってくれるためでね。というのは、ぼくはその頃からすでに憎まれっ子だったんだ」

こんどはモニカを指しながら、

「彼女のほうは十三年来だ。仲むつまじい夫婦の典型さ。きみ、よく見ておくんだね」

前方の座席では、ジェロームもモニカも彼の言うことを聞いている様子はなかった。軽い、ほとんど狎れあいといってもいい微笑が二人の唇に浮んでいた。

「そしてぼくが離婚したとき」とスタニスラスはつづけた、「慰めてくれたのもこの二人だ、ぼくはひどく悲観してたからね」

車は北高速道路を猛烈なスピードで走っていたので、若いベティーは質問するのに大声を張り上げなければならなかった。

「なぜ悲観したの？　あなたの奥さま、あなたを愛さなくなってたの？」

「ちがうよ！」とスタニスラスが叫び返した、「ぼくの方が彼女を愛さなくなっていたのさ。信じてもらいたいが、それは紳士にとっては耐えがたい苦痛なんだぜ」

そう言って彼は爆笑し、勢いよくシートにそっくりかえった。

そのあと、ロワッシー空港の地獄的な雑踏があったが、みんなはジェロームが切符を見せたり、荷物を預けたり、何もかもてきぱきと処理してゆく有能ぶりに感嘆していた。三人はただ眺めるだけだった。二人の女性はもちろん男性が彼女たちの世話をするのに馴れていたし、スタニスラスは小指一本動かせば自分の名誉にかかわるという風だった。つぎに、数々の廊下を通り、空港の透明な合成樹脂の天蓋の下を登るエスカレーターに乗った彼らは、凍りついたような不動の姿勢で一組ずつ進んでいった。それはまさに現代の金持カップルの既製品的イメージだった。それから飛行機搭乗、彼らは一等客室に一組ずつ前後に席を占め、モニカは手渡された絵雑誌をめくりもしないで、窓越しに雲がつぎつぎと去ってゆくのを眺めていた。ジェロームが席を立つと、突然、彼女の近くにスタニスラスの横顔があった。彼は手で窓越しに何かを彼女に指し示しているようなふりをしながら、しかし低声で彼女にささやいた。

「ぼくはきみが欲しいんだ、ねえ、なんとかうまくチャンスをつくってくれない？　いつでもいいが、とにかくこのウィーク・エンド中にきみが欲しいんだ」

彼女は眼をしばたたいたが、何も答えなかった。

「きみも、そうしたいって言って」と彼は相変らず何気なく微笑しながら言い足した。

彼女は彼のほうにふり向いて真面目な眼付で彼を見つめたが、なにも言い出さないう

ちに、機内のマイクがアナウンスをはじめた。《まもなくミュンヘン空港に着陸いたします。みなさまお席にお戻りくださいませ。ベルトをおしめになり、煙草の火をお消し下さいませ》二人は一瞬互いに眼を見つめ合った、仇敵同士のように、また恋人同士のように。彼は今度は心から微笑し、それから自分の席に戻った。いれちがいに、ジェロームが戻ってきて彼女の傍に腰をおろした。

どしゃぶりの雨だった。一同はレンタカーで狩猟小屋へ行くことになっていた。むろん運転はジェロームだった。車に乗りこむ前、モニカはあたたかい思いやりの様子で、ベティーという女性に、乗物に酔いやすいかと訊ねた。人から敬意を受け、上品ぶりたいという気持がありありと感じられたベティーは、うなずいて前方の座席のジェロームの隣りに腰かけた。

ジェロームはとても上機嫌だった。枯葉があり、雨があり、霧もかかりはじめていて、彼は運転に注意を集中しなければならなかったが、ライトやワイパーの操作、エンジンの音などが彼と他の三人とのあいだに決して不愉快でない一種の壁を形成していた。いつものように彼は自分が責任を担う者であること、みんなを狩猟小屋へ運ぶこの広々とした小さなキャビンのパイロットであると感じていた。彼はハンドルをきり、アクセルをふみ、ブレーキをかけながら、手馴れた安全運転とともに、自分もふくめて四人の生命を導いていた。カーヴは非常にきつく、しかもすでに真暗になっていた。道路はけわ

しく、左右から落葉松や樅、それに急流が迫っていた。ジェロームは窓から秋の古典的な香りをありったけ吸いこんでいた。たぶん何度もカーヴがあるせいだろう、スタニスラスとモニカは一言も喋らなくなっていた。彼はちょっと彼らのほうへ頭を向けて、

「きみたち眠ってるんじゃないだろうね？　ベティーはいびきをかかんばかりだ」

スタニスラスは笑って、

「いや、眠ってなんかいない。眺めてるのさ、闇をね」

「少し音楽でもかけようか？」

彼がラジオをつけると、とたんにカバルの途方もない声が車じゅうに満ちあふれた。彼女は『トスカ』の大アリアを歌っていて、ジェロームは自分でも驚いたことに涙が眼にあふれてくるのを感じ、思わずワイパーを動かしはじめたが、彼の視界を曇らせているのが秋のせいではないことに気がついた。その瞬間彼は思った、《ぼくはこういう気候が好きだ、この地方、この道路、この車、そしてとくにぼくの背後にいるあの黒い髪の女を愛している。ぼくの妻であり、いま歌っているこの別の女の声をぼくと同じ喜びをもって聞いているあの女を……》

ジェロームという男は心に思っていることを表現したり話したりすることがいったいに少なく、自分自身に向ってよりは他人に対してはさらに少なかった。人びとは彼のことを単純な、ほとんど粗野な男だと言っていたが、このとき彼はいきなり車を止め、降

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com